

行政区域再編状況と人口推移に見る日南町の地域特性

一鳥取県日野郡日南町の事例研究 その2一

たたら製鉄 行政区域再編
中山間地域

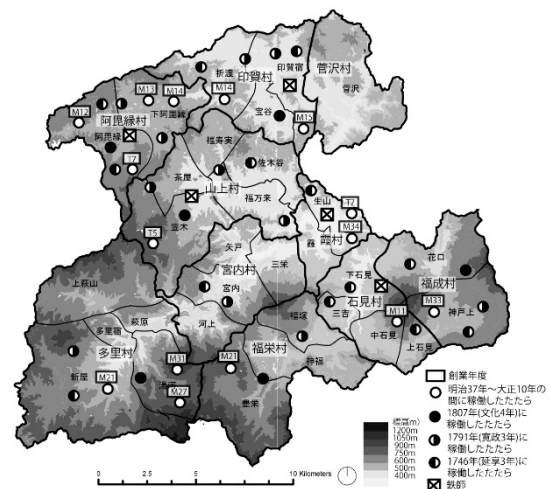
準会員 ○小野 浩一*
正会員 中園 真人**
同 細田 智久***
同 牛島 朗****
同 三島 幸子*****
同 今富 良介*****

1. 研究背景・目的

その1において現代の施設再編の現状を明らかにしたが、本研究では現在の日南町に至るまでの経緯を過去に日南町を支えた産業を通して、行政区域変遷と人口推移の要因を分析し、日南町の地域特性を探る。

2. 日南町のたたら製鉄(図1)

日南町域で江戸から明治にかけて主幹産業となっていたのがたたら製鉄である。鉄の原料となる砂鉄には真砂砂鉄と赤目砂鉄があり、中国山地ではより良質な真砂砂鉄が多く採掘できたこともあり、一時中国地方の鉄生産量は国産の約96%を占め^{文1)}、江戸時代日本の鉄の消費量の三割は現在の日南町で、作りだされたと思われる^{文3)}という記載もある。日南町の中でも特に大宮・多里・山上・阿毘縁地方が真砂砂鉄の有力な産地で、石見・福栄は赤目砂鉄の産地となる。明治40年、同日野郡の日野町に本拠を置く近藤家のたたら製鉄従事者が7312人となっており^{文3)}、衰退し始めた時期でこの人数を抱えているとなると、日南町の鉄師は江戸中期27人であるため^{文6)}、かなり人口が日南町でたたら製鉄に従事していたこととなる。日南町のたたら製鉄の行われ方は寛容なものであった。鉄師やたたらへの制限がないため各地でたたらが開かれ、同じ山にいくつかの鉄師が点在する状況が発生した。その結果、木材が減少し、たたらが稼働できなくなる^{文3)}ということが起きていた。一方では隣接する奥出雲町においてもた



*たたら・鉄師の位置は明治14年時または明治22年時の村名までしか示されていないため村のどこに位置するかは不明

図1 江戸時代・明治・大正のたたら・鉄師の分布
たたら製鉄が盛んに行われており、松江藩が鉄師・たたら・大鍛冶屋を限定する代わりに、保護政策が敷かれるなど藩が全面的な協力を行った。この点で日南町は資源に恵まれながら大鉄師と呼ばれるものが存在しなかった要因だと思われる。図1には著名な鉄師とたたらを位置を示した。しかし、明治25年にはすでに伯耆全体で鉄師が近藤家のみ^{文4)}となっている。4時期でたたらが操業されている村は阿毘縁・印賀・山上・多里で、真砂砂鉄の分布と一致し、この地区では盛んにたたら製鉄が行われたようである。日南町で最後に操業していた近藤家大正末期に廃業し、戦争需要に答え、復活はしたが一時的なものであった。

Regional characteristic of Nishinan Town as seen in administrative division reorganization and population transition- Case Study of Nishinan Town, Hino Gun, Tottori Prefecture vol.2 -

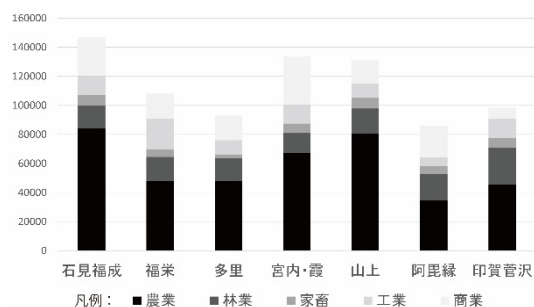
ONO Kohichi, NAKAZONO Masato,
HOSODA Tomohisa, USHIJIMA Akira,
MISHIMA Sachiko, IMATOMI Ryosuke

以上のように日南町のたたら製鉄は江戸から明治初期には繁栄したが、明治中期あたりから陰りが見え始め、大正末期に操業を終了した。

3. たたら製鉄のその後（図2・3）

明治後期から大正にかけて、たたら製鉄従事者の雇用を埋めるため、新たな産業の獲得が重要であった。主だった産業の出来事を見ていく。鉱工業では多里地域でクロム鉱が発見され、盛り上がりを見せた。1895年に若松鉱山、1907年に広瀬鉱山・日野上鉱山が発見された。1899年に稼働を開始した若松鉱山はクロム産出量で日本一を誇り、1996年（平成8年）まで鉱石を産出し続けた。^{文5)} その規模は図3を見るとわかる。農家の大部分がたたら製鉄などに使われる木炭製造を副業として稼いでいたが、たたら製鉄衰退後も県内外で工鉱業の発生と、国民生活水準向上による消費活動の拡大から木炭需要は続いていた。^{文3)} 大正12年に生山、大正15年に上石見に鉄道が開通したことにより流通も広がり^{文3)}、1940年代まで需要に答えた。たたら製鉄の山林乱伐により、日野川で水害が起こり、水害対策として造林に力を注いだ。大幅な支援金を各村得て、造林を進め^{文3)} 明治42年には霞・宮内が町全体の33%の所有林価格となり、内に占める用材林が増加した。次いで、山上20.8%であった。図2に明治42年の各村の生産額を示しているが、どの村も主幹産業は農業で、次いで林業または商業となっている。街道沿いの石見・福成・宮内・霞の商業が高い。明治後期はたたら製鉄衰退期であり、工業の割合がすでに全面的に低下傾向であるが、たたら製鉄有力地の阿毘緑・印賀・菅沢では林業の占める割合が大きく、福栄や印賀・菅沢で工業の割合が高い。昭和33年の生産額を示す図3では明治後期でたたら関連での収益を目指した高宮（印賀・菅沢・阿毘緑）と福栄は生産額が非常に小さい額となった。全体の伯南は明治42年時に林業が町内で最も盛んな宮内・霞・山上の合併で昭和33年には割合が高くなっている。

明治から昭和にかけての日南町の主幹産業は農業で、林業が次に大きな産業だが、たたら製鉄で蓄えられた人口を補うだけの雇用が得られた



*工業には酒・醤油・製鉄・鍛冶・製材・製炭・クロムなど

図2 明治42年村別生産額

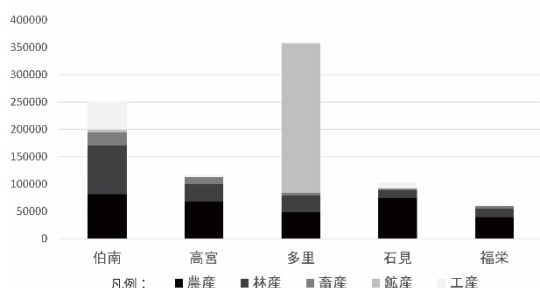


図3 昭和33年村別生産額

とは考えられず、中心地の宮内・霞は商業での収益が伸ばす間に、山間部奥地の印賀・菅沢・阿毘緑・福栄では農林業に頼る傾向にあったと推測される。

4. 行政区域変遷（図4・表1）

明治12年時に31村あった村数は明治21年の市制・町制の施工で明治22年に10村となる。昭和の大合併直前に徐々に合併が進み、7村になり、昭和の大合併で1町となる。1町合併まで明治大合併のまま合併しなかった村は多里村・福栄村・石見村。明治大合併から最も早く合併したのは菅沢村・印賀村である。明治22年の合併は地形によるものが大きい、霞・阿毘緑・印賀に関しては明治初期から考えても合併村数が少ないが、鉄師の存在した地区と一致する。多里村合併は多里宿が栄えていたことや新屋・湯河など鉱工業が盛んに行われた地区でそれぞれに財源があったことが伺えるが、谷合であるため居住地としては多里宿、萩原あたりを中心に合併していると考えられる。明治45年の石見合併で旧石見村は街道に沿っ

て宿場町のような役割をもっていたが、地形は平坦な地域も多くあり、農業のしやすい環境といえる。福成村は傾斜地が多いが、石見村と福成村の合併で農林業における発展が目的となる合併とも言える。大正6年の大宮村合併、昭和30年の高宮村合併も村同士は中心地から山によって分断された地域であるため、商業利益を伸ばす合併ではなく、農林業がほとんどの収益を占める村同士の合併であったと思われる。日野上合併は両村とも農業を除いたとき商業主体の村同士であり、農業よりも商業に力をいれた発展を望む形の合併であったと考えられる。伯南合併は図2で日野上地区よりも高い生産額の山上村との合併で財政を強めた。

大正の中心部と山間部奥地それぞれ同士の合併で産業に偏りができ、昭和30年から昭和34年への段階的な合併は中心地日野上と山間部奥地の村の産業規模の違いが伺える合併であった。

5. 日南町の人口 (図5~8)

図5・6から日南町は明治22年時点に12351人で表中の四番目に高い人口であるが平成27年には4765人と全体としては多いが減少率は非常に高い。平成27年の減少を見ると明治期を振り返ると、たたら製鉄における盛り上がりがかがえる。図7で1908年(明治41年)以降、たたら製鉄の衰退で、1920年(大正9年)まで減少傾向にあるが大正12年に生山に鉄道が開通したことで1925年(大正14年)に石見村・日野上村の人口増加が見られる。1947年(昭和22年)終戦と第一次ベビーブームで人口が大きく増加した。特に増加したのは日野上村と石見村である。大宮村・阿毘縁村は戦争による人口減少も第一次ベビーブームによる人口増加もどちらの傾向も小さい。人口が少なければ、出来事に関する振れ幅は小さくなるのだが、これほど影響が小さいのは高齢化の進行が考えられる。1959年(昭和34年)に日南町合併が成立しているが、1960年(昭和35年)高度経済成長に

表1 行政区域変遷

M9~鳥取県		M14~鳥取県						
1877	1879	1879~1889	1889.4	1912	1917	1921	1955	1959
M10	M12	M12~M22.3	M22.4	M45	T6	T10	S30	S34
菅沢村	菅沢村	菅沢村	菅沢村	菅沢村	大宮村		高宮村	
印賀宿	印賀宿	印賀宿	印賀村	印賀村	大宮村		高宮村	
宝谷村	宝谷村	宝谷村	宝谷村	宝谷村	大宮村		高宮村	
折渡村	折渡村	折渡村	折渡村	折渡村	大宮村		高宮村	
下阿毘縁村	下阿毘縁村	下阿毘縁村	下阿毘縁村	下阿毘縁村	阿毘縁村		伯南町	
阿毘縁村	阿毘縁村	阿毘縁村	阿毘縁村	阿毘縁村	阿毘縁村		伯南町	
茶屋村	茶屋村	茶屋村	茶屋村	茶屋村	山上村		伯南町	
笠木村	笠木村	笠木村	笠木村	笠木村	山上村		伯南町	
福寿実村	福寿実村	福寿実村	福寿実村	福寿実村	山上村		伯南町	
福万来村	福万来村	福万来村	福万来村	福万来村	山上村		伯南町	
佐木谷村	佐木谷村	佐木谷村	佐木谷村	佐木谷村	山上村		伯南町	
河上村	河上村	河上村	河上村	河上村	山上村		伯南町	
宮内村	宮内村	宮内村	宮内村	宮内村	宮内村		伯南町	
矢戸村	矢戸村	矢戸村	矢戸村	矢戸村	宮内村		伯南町	
大森村	大森村	大森村	大森村	大森村	宮内村		伯南町	
三栄村	三栄村	三栄村	三栄村	三栄村	日野上村		伯南町	
露村	露村	露村	露村	露村	露村		伯南町	
生山村	生山村	生山村	生山村	生山村	多里村		伯南町	
多里宿	多里宿	多里宿	多里宿	多里宿	多里村		伯南町	
湯河村	湯河村	湯河村	湯河村	湯河村	多里村		伯南町	
萩原村	萩原村	萩原村	萩原村	萩原村	多里村		伯南町	
上萩山村	上萩山村	上萩山村	上萩山村	上萩山村	多里村		伯南町	
新屋村	新屋村	新屋村	新屋村	新屋村	多里村		伯南町	
豊栄村	豊栄村	豊栄村	豊栄村	豊栄村	福栄村		伯南町	
福塚村	福塚村	福塚村	福塚村	福塚村	福栄村		伯南町	
神福村	神福村	神福村	神福村	神福村	福栄村		伯南町	
神戸上村	神戸上村	神戸上村	神戸上村	神戸上村	福成村		伯南町	
花口村	花口村	花口村	花口村	花口村	福成村		伯南町	
上石見村	上石見村	上石見村	上石見村	上石見村	石見村		伯南町	
中石見村	中石見村	中石見村	中石見村	中石見村	石見村		伯南町	
下石見村	下石見村	下石見村	下石見村	下石見村	石見村		伯南町	
上野村	上野村	上野村	上野村	上野村	石見村		伯南町	
三吉村	三吉村	三吉村	三吉村	三吉村	石見村		伯南町	
		(M14,改称)						
32	31	10	9	8	7	5	1	

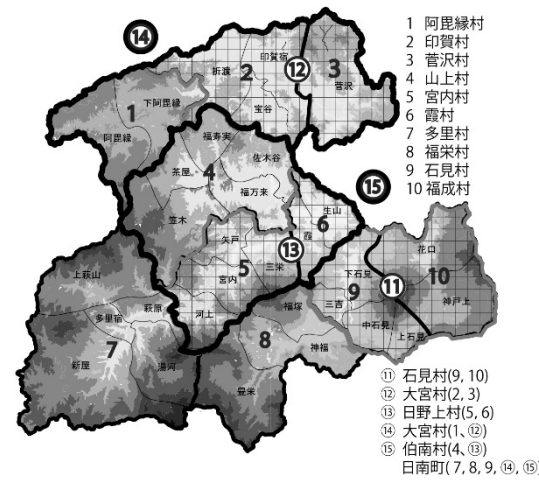


図4 行政区域変遷マップ

よる都市部への流出が抑えられず、徐々に人口が減少していく。図8で1960年に多里村のみ人口が増加しているが、クロム鉱山により雇用

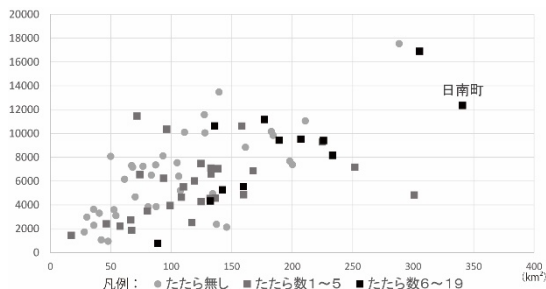


図5 中国地方山間農業地域における昭和35年行政区分明治22年時人口

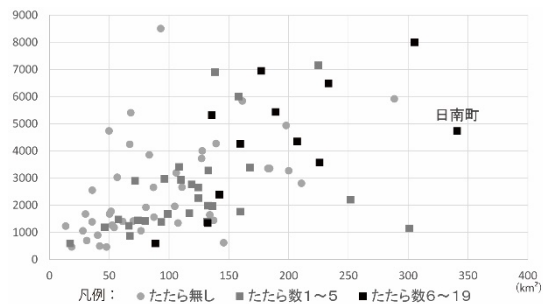


図6 中国地方山間農業地域における昭和35年時行政区分平成27年時人口

*昭和25年時行政区分の山間農業地域分類された自治体数が昭和35年時行政区分内の70%以上の町村のみ

が増えていたためである。1965年(昭和40年)からはクロム鉱産出量減少と対応して人口が減少した。たたら製鉄の廃業までは多里村・山上村の人口が多いが、日野上村・石見村の合併後は差が開いていった。日野上村・石見村の人口は多いが、他村同様に減少している。

以上のように日野上・石見村とその他山間部奥地の人口差が広がっており、山間部奥地の人口流出が多いためか、たたら製鉄廃業後はほとんどの人口増加が見られない。1947年～1955年の人口増加は日野上村・石見村で増加した割合が大きい。

6. まとめ

- 1) 合併の傾向は商業がある村同士、農林業がある村同士で合併が行われた。
- 2) その結果、中心地と山間部奥地とがそれぞれ合併後、中心地は徐々に発展を遂げてきてい

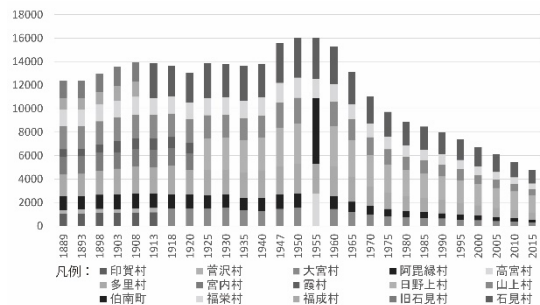
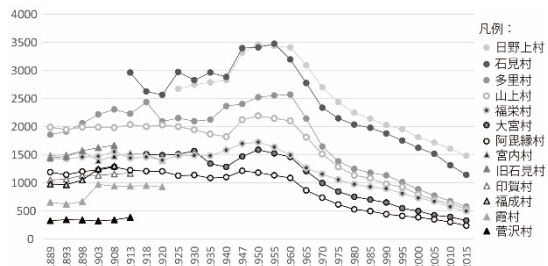


図7 日南町人口



*△は大正10年合併後消滅している村

*昭和30年の人口は合併後のものしかわかっていないため前年度の平均値とした

図8 日南町各村人口

るが、山間部奥地では終戦後も人口増加が小さく村単位での発展が難しい状況となった

3) 山間部で砂鉄やクロム鉱などの資源に恵まれるも、人口集積に差が生まれた要因は産業を除くと、地形上での課題があり、傾斜の大きい多里・福栄・阿毘縁地区等では人口を留めることが難しい。

参考文献

- 文1) 出雲たたら風土記 HP
- 文2) 里山おのみや
- 文3) 日南町史政治経済 1p16, 30, 105, 165, 704
- 文4) 日南町史近代政治経済 2 近代史年表
- 文5) 地質ニュース 664号
- 文6) たたら side-bookAtoB

* 山口大学工学部感性デザイン工学科 4年

**山口大学大学院創成科学研究科 教授 工博

*** 米子工業高等専門学校建築学科 准教授 博士(工学)

****山口大学大学院創成科学研究科 助教 博士(工学)

*****山口大学大学院創成科学研究科 大学院生

* Undergraduate, Dep. of KANSEI Design Eng., Faculty of Eng., Yamaguchi Univ.

** Prof., Graduate School of Sciences and Tec. for Innovation, Yamaguchi Univ., Dr. Eng.

*** Associate Prof., National Institute of Technology, Yonago College, Dr. Eng.

**** Assistant Prof., Graduate School of Sciences and Tec. for Innovation, Yamaguchi Univ., Dr. Eng

***** Student, Graduate School of Sciences and Tec. for Innovation, Yamaguchi Univ